

シャルロッテ・リンクのミステリー小説

— 文化的テキストとして娯楽文学を読む —

横山 香*

Charlotte Link's Mystery Novels:
Reading Popular Fiction as a Cultural Text

Kaori YOKOYAMA

要 旨

本稿ではドイツのベストセラー作家シャルロッテ・リンク (Charlotte Link, 1963-) の5つのミステリー小説を取り上げ、女性の登場人物を中心に考察した。人間関係に悩み、孤独で内面に傷を抱えた彼女たちの、怒り、憎しみ、孤独、絶望といった負の感情を、リンクは徹底してリアルに描く。これらの負の感情は、孤独は恥であり、愛されることが幸福であるといった現代社会の価値観に彼女たちが束縛されているために生じるものである。もっともリンクは、そこから自らを解放しようとする姿も描くことを忘れない。こういった登場人物の心理や感情描写は、ミステリー小説の本筋からすれば「余分」であるが、まさにこの部分によって、読者を感情的にテキストに関わらせ、読者に力を与えることになっている。

本稿ではジェンダーの視点から、リンク作品を文化的なテキストとして読む試みをおこない、娯楽文学研究の方法のひとつの可能性を示した。

キーワード：シャルロッテ・リンク、ドイツのベストセラー小説、女性の登場人物、感情のリアリズム、文化的テキスト

I はじめに

シャルロッテ・リンクは、現在ドイツでもっとも成功しているベストセラー作家のひとりである。彼女の小説はドイツ国内だけでも3,200万部以上の売り上げがあり¹⁾、新作が出れば、即座に雑誌『シュピーゲル』(Der Spiegel)のベストセラーリストの上位に登場する。

リンクは、1963年にドイツのフランクフルト・アム・マインで、ジャーナリストで作家の母と民事裁判官の父とのあいだに生まれた。彼女自身もフランクフルトで法学を学び、その後ミュンヘンで歴史学と文学を学んだ。16歳ですでに小説を書き始め、1985年にローヴォルト出版からデビュー作『クロムウェルの夢もしくは美しいヘレナ』(Cromwells Traum oder Die schöne

Helena) が出版された。この作品を含め、第一次世界大戦からドイツ再統一までを舞台に三代の女性たちを描く『嵐のとき』三部作 (*Sturmzeit-Trilogie*) までは歴史小説²⁾ である (1991 年刊行の『影絵』 (*Schattenspiel*) を除く)。

一方、1997 年の『姉妹の家』 (*Das Haus der Schwestern*) では、二十世紀を生きた女性フランシスの手記がメインとなっており、この部分は初期の歴史小説に近いものはあるが、現代の事件がこの過去の因縁によって引き起こされるという構成によって、ミステリー (Kriminalroman, Krimis³⁾) と分類される。この作品はリンクにとって初のベストセラーとなり、この後は、現代が舞台のミステリー (もしくは心理サスペンス) 小説を次々とヒットさせ、ドイツの国民的作家として確固とした地位を築いていく。

他にも妹の死を扱った手記やヤングアダルト小説など、多くの作品を発表している。以下がタイトルと初版の出版社、初版の発売年である (共著とテレビドラマ用脚本は除く)。* は本稿で扱う作品。

【長編小説】

Cromwells Traum oder Die schöne Helena. Rowohlt, 1985

Wenn die Liebe nicht endet. Rowohlt, 1986

Die Sterne von Marmalon. Goldmann, 1987

Verbotene Wege. Goldmann, 1987

Sturmzeit. (Sturmzeit-Trilogie 1) Blanvalet, 1989

Schattenspiel. Blanvalet, 1991

Wilde Lupinen. (Sturmzeit-Trilogie 2) Blanvalet, 1992

Die Stunde der Erben. (Sturmzeit-Trilogie 3) Blanvalet, 1994

Die Sünde der Engel. Goldmann, 1996

**Das Haus der Schwestern*. Blanvalet, 1997 (邦訳『姉妹の家』園田みどり訳、集英社文庫、2010 年)

**Der Verehrer*. Goldmann, 1998

Die Rosenzüchterin. Blanvalet, 2000

Die Täuschung. Goldmann, 2002

**Am Ende des Schweigens*. Blanvalet, 2003 (邦訳『沈黙の果て』(浅井晶子訳) 創元推理文庫、2014 年)

Der fremde Gast. Goldmann, 2005

Die Insel: Eine unheimliche Geschichte. Rowohlt, 2006

Das Echo der Schuld. Blanvalet, 2006

Die letzte Spur. Goldmann, 2008 (邦訳『失踪者』(浅井晶子訳) 創元推理文庫、2017 年)

**Das andere Kind*. Blanvalet, 2009

Der Beobachter. Blanvalet, 2012

Im Tal des Fuchses. Blanvalet, 2012

**Die Betrogene*. (Kate-Linville-Reihe 1) Blanvalet, 2015 (邦訳『裏切り』(浅井晶子訳) 創元推理文

庫、2022年)

Die Entscheidung. Blanvalet, 2016

Die Suche. (Kate-Linville-Reihe 2) Blanvalet, 2018

Ohne Schuld. (Kate-Linville-Reihe 3) Blanvalet, 2020

Einsame Nacht. (Kate-Linville-Reihe 4) Blanvalet, 2022

【手記】

Sechs Jahre: Der Abschied von meiner Schwester. Blanvalet, 2014

【ヤングアダルト小説】(シリーズ1～3は1990年、シリーズ4は1991年にLübbeから刊行されたオリジナル版からタイトルを変更して再版。)

Mitternachtspicknick. (Reiterhof Eulenburg 1) Boje, 2010

Diamantenraub. (Reiterhof Eulenburg 2) Boje, 2010

Gefährlicher Sommer. (Reiterhof Eulenburg 3) Boje, 2010

Mondscheinge Flüster. (Reiterhof Eulenburg 4) Boje, 2010

リンクの作品はいずれもページターナーであることは間違いがない。とりわけミステリー小説においては、これは重要な要因である。しかし少なくとも本稿で用いる作品を読む限り、ストーリー展開のテンポはそれほど早くない。むしろ、登場人物たち（その多くは女性である）の日常生活や、心理描写に多くの紙面が割かれている。純粋に筋だけを追って早く結末を知りたい読者にとっては、これは「余分」のようにも思われる。しかしまさにこの「余分」に、リンクのポピュラリティの源泉を知るヒントがあるのではないか。

本稿では、リンクのベストセラーになったミステリー小説を中心に、ストーリーとテーマ、および登場人物について概観し、この「余分」に注目して考察する。

II シャルロット・リンクの作品：あらすじとテーマ

A. *Das Haus der Schwestern*⁴⁾ (1997) (以下 HS, 『姉妹の家』)

『姉妹の家』は1997年に出版され、リンク初のベストセラーとなった作品である。2002年にはドイツの公共放送 ZDF でテレビドラマ化もされ、日本でも翻訳が出版されている。

有能な弁護士バルバラ・アムベルクは、同じく弁護士の夫ラルフとの破綻しかかった夫婦関係を修復するために、ドイツからイギリス・ヨークシャー⁵⁾にある農園、通称「姉妹の家」でクリスマス休暇を過ごすことにする。だが折しもの悪天候で、雪に閉ざされてしまう。そこでこの家のかつての主だったフランシス・グレイが自らの半生を綴った手記を見つける。

フランシスは知的で自立心が旺盛であった。幼なじみで名家のジョン・リーとは互いに好き合っていたが、彼のプロポーズを断り、ロンドンへ行く。そこで兄ジョージの恋人アリスが参加する女性参政権獲得運動(サフラジェット)に関わり、刑務所送りになる。おばの家で同居していた男性と関係を持つが、彼女は結婚するつもりはなく、その男性は後に自死を遂げる。結局フランシスは故郷ヨークシャーに戻ることにするが、到着したまさにその日、ジョンがフランシスの妹

ヴィクトリアと結婚式を挙げていた。

第一次世界大戦が始まり、出兵した兄ジョージは心に深い傷を負い、廃人同様になる。同じく出兵したジョンを追ってフランスに渡ったフランシスは、彼と再会し愛し合うようになる。しかし彼もまた心に傷を負い、アルコール依存症になってしまう。

アリスはジョージと別れ、ロンドンに戻って「孤独をまぬがれるため」「彼女にふさわしくない」男と結婚し [HS, 344]、ふたりの娘が生まれる。その長女が、現在「姉妹の家」の主であるローラ・セリーである。第二次世界大戦が始まり、ローラは妹のマージョリーとともにフランシスのところに疎開してくる。マージョリーはロンドンの父のもとに帰るが、ローラはその後もフランシスになかばいいように使われていることが分かっているながらも、崇拝するフランシスのところに居続け、フランシスの死後「姉妹の家」を相続する。

戦争のさなか、農村は戦火を逃れていた。夫をナチスに殺されフランスから逃れてきたマルグリットという女性がこの村にやってくる。彼女はジョンとの子どもを妊娠し、彼と再婚する。子どもができずジョンと離婚し、実家に戻っていたヴィクトリアは絶望を深めていく。ある日、けがをしたドイツ兵スパイが「姉妹の家」にやってくる。彼はこの家に匿われることになり、「姉妹の家」の女たちに決定的な事件が起こる。手記を読んでこの事件の真相を知ってしまったバルバラにも危険が襲い掛かる。

この小説は、バルバラの身に降りかかる「現在」と、フランシスの半生という「過去」が交互に語られる構造になっているが、物語の大半はフランシスの手記から構成されている。手記は、彼女が14歳の1907年から始まる。1910年にロンドンに出て、女性解放運動家のアリスと関わり、刑務所ではハンガーストライキと強制摂食⁶⁾という過酷な体験をすることになる。リンクがインタビューのなかで、ロンドン・ホロウェイ刑務所の展示で女性参政権運動を知ったことが『姉妹の家』執筆のきっかけとなったと述べているように⁷⁾、このあたりの描写はかなり詳細でリアリティがある。

史実にかんする細かな描写は、第一次世界大戦のさなか、フランシスが看護助手として働くフランスの野戦病院や、第二次世界大戦のロンドン空襲においても見られる。ここでも「戦争についてはじっくり調査してから執筆した」⁸⁾と著者が述べているとおり、「歴史の教科書」のような「客観的で感情を交えない記述」⁹⁾は、著者のこれ以前の歴史小説と共通している。ただし、「現在」の物語が全体に占める割合は少ないとはいえ、上述したように、プロットとしてはミステリー小説であり、どこをメインに読むかによって、読み方が変わってくる小説であるとも言える。

B. *Der Verehrer* (1998) (以下 DV, 『崇拝者』¹⁰⁾)

フランクフルトに住むレオナ・ドルンは、出版社で編集者として働く既婚の女性である。ある日、彼女はある女性が自殺する現場に居合わせる。その女性はエーファ・ファビアーニといった。ある晩、エーファの友人リュース・デーア・バーレンブルクに無理やり誘われて遺品整理をしていたときに、レオナはエーファの兄、ローバルト・ヤブロンスキと出会う。

レオナは、テレビ局で働く夫ヴォルフガングから、突然離婚を言い渡されていた。好きな女性ができ、人生をやり直したいという。彼女には子どもがおらず、経済的には自立しているため、

あとはレオナが決断するだけであった。エーファの自殺現場に居合わせたことや、離婚問題で落ち込んでいたレオナは、ローベルトと再会し、恋愛関係になる。

一方、バイエルンのとある村近くの森のなかで、若い女性の惨殺死体が発見される（この部分は冒頭に書かれている）。被害者の妹リーザ・ヘルダウアーは、父の介護をひとりで行きながらその村で暮らしていた。姉は数年前から音信を絶っていたが、父の死後、ひとりになってしまった彼女は、姉の死の真相を探ろうとする。

春になり、レオナとローベルトは、ローベルトが育ったというスイスのアスコナに旅行する。そこでローベルトがどこかおかしいことに気づき、彼の嘘も発覚して、別れを決意する。しかしその後、レオナの周辺で次々と奇怪な事件が起こり始める。やがてローベルトを軸に、女性惨殺事件との関連が浮かび上がってくる。

『姉妹の家』の翌年に出版された本作の舞台は現代のドイツで、歴史小説の要素はまったくない心理サスペンス小説になっている。他のリンク作品同様、登場人物の多くは女性であるが、リューディアやリーザといった本筋とはそれほど関わらない女性たちの内面にまで焦点が当てられており、これについては次章で詳細にみる。

C. *Am Ende des Schweigens*¹¹⁾ (2003) (以下 ES, 『沈黙の果て』)

アレクサンダー・ヴァールベルク、レオン・ロート、ティム・ブルクハルトは寄宿学校の同窓生で、互いの家族をともなう、レオンの妻パトリツィアが祖父から相続したイギリス・ヨークシャーの古い屋敷で休暇旅行を過ごすことを慣例にしていた。アレクサンダーは大学教授で、獣医のイエシカと最近再婚した。スペイン人の前妻エレナとのあいだにリカルダという娘がいる。レオンは弁護士で、パトリツィアとのあいだにはふたりの娘がいる。ティムは著名なセラピストで大儲けしており、妻のエヴェリンはいつも高価な服を着ている。

典型的なドイツの中産階級の、一見幸福そうな三組の家族には、それぞれ抱えている問題があった。義母となったイエシカを憎むリカルダは、アレクサンダーとイエシカのけんかの種になっている。エヴェリンは流産したことがトラウマとなり、いまは過食症で太っていて、しょっちゅう怪我をしている。レオンは事務所を独立してしまったがために破産寸前で、ティムからの借金も返せず、妻のパトリツィアにその事実を言い出せないでいる。

休暇中のある日、散歩から戻ってきたイエシカが、パトリツィアとふたりの娘、ティム、アレクサンダーが屋敷のなかで惨殺され、エヴェリンが血まみれになってうずくまっているのを発見する。警察はエヴェリンを容疑者として拘留するが、新たな容疑者が浮上する。彼はフィリップ・ポウエンとって、パトリツィアの祖父の非嫡出子であり、この屋敷の相続権があると主張していた。彼の恋人ジェラルディン・ローズラフがフィリップの気を引きたいがために、アリバイを偽証していたが、フィリップが彼女とは絶対に結婚しないと宣告したため、アリバイを撤回したのだった。

イエシカはエヴェリンの無実を信じ助けようとするが、そのなかで夫たちが実は友情でつながっていたわけではなかったことや、ティムがエヴェリンへ日常的に暴力をふるっていたことを知るようになる。フィリップが逮捕され、イエシカはふたたびエヴェリンのいるヨークシャーに

向かい、そこですべての真実を知ることになる。

本書はドイツ書籍賞 (Deutscher Bücherpreis¹²⁾) の文芸書部門にノミネートされた作品で、リンクがベストセラー作家として確固たる地位を築いた時期の作品となる。舞台はイギリスであるが、主要な登場人物はドイツ人になっている。「フーダニット」(犯人は誰か) の構成ではあるが、登場人物の女性たちの心理や行動に多くの紙面が割かれている。次章では、エヴェリンに焦点を当てる。

D. *Das andere Kind* (2009) (以下 AK, 『もうひとりの子』)

ロンドン在住の医師レスリー・クレイマーは、故郷ノース・ヨークシャーの農場に住む幼なじみのグウェン・ベケットから婚約パーティの招待を受ける。グウェンの父チャドとレスリーの祖母フィオナ・バーズは昔からの知り合いで、幼くして母を亡くしたレスリーはフィオナのもとで育った。グウェンは田舎育ちの何の取り柄もない、見栄えも良くない「オールドミス」である。その彼女が、ハンサムで教養はあるが定職のないデイヴ・タナーと婚約するという。

レスリーは故郷に帰り、グウェンの婚約パーティに参加する。しかしフィオナが、財産目的の結婚だとデイヴを攻撃し、パーティを台無しにする。その晩、フィオナが殺害される。その4カ月前に、そのあたりでは女子大生が殺害されていた。双方の被害者と関わっていたデイヴが容疑者として警察に追われることになる。

フィオナは「もうひとりの子」という手記を書き、チャドにメールで送っていた。グウェンが父のパソコンから盗んだそのファイルは、結局レスリーの手に渡ることになる。フィオナは、第二次世界大戦の児童疎開でロンドンからチャドの農場に来た。そのとき、フィオナの近くに住んでいた知的障害がある孤児ブライアンが、何も分からず彼女についてきてしまっていた。チャドの母親はブライアンを受け入れてかわいがったが、フィオナとチャドは彼を *Nobody* と呼び邪険に扱った。戦後、フィオナがロンドンに戻っているあいだに、ブライアンはチャドの農場からいなくなっていた。

フィオナの手記を読んだレスリーは、ブライアンを目撃したという女性のもとを訪ねる。チャドの農場から鬼畜の男に受け渡されたブライアンは、最近になって救出されるまで、家畜小屋に鎖でつながれ虐待を受け続けていた。彼はフィオナの「また来るから」ということばを信じて待ち続けていたのであった。だがフィオナもチャドも、彼に何が起きているかを予感しつつ、何十年も彼を救おうとしなかった。フィオナ殺しはデイヴの仕業か、あるいはブライアンの復讐なのだろうか。

リンクはインタビューで『もうひとりの子』の執筆動機について、第二次世界大戦時に、都会から田舎に集団疎開した子どもたちのなかには、労働力として使われたり、虐待されたりした子もいた、という話を聞いたことにあると語っている¹³⁾。フィオナの手記が歴史的出来事に基づいている点では、『姉妹の家』のフランシスの手記と類似しているところがあるが、全体の比重が過去にある『姉妹の家』とは異なり、フランシスを含め、現在起きているいくつかの殺人事件とその犯人の解明に重点が置かれている点で、よりミステリー色が濃いものになっている。次章では、キーパーソンのひとりであるグウェンに注目したい。

なお、この小説の舞台はイギリスで、登場人物もすべてイギリス人となっており、ドイツ人は登場しない¹⁴⁾。これは後に紹介する『裏切り』でも同じである。

E. *Die Betrogene* (2015) (以下 DB, 『裏切り』¹⁵⁾)

元警官のリチャード・リンヴィルが自宅で激しい暴行を受け、殺された。現役時代、数多くの犯罪者を刑務所送りにしてきたため、逆恨みしていた人物に捜査の的が絞られることになった。

リチャードの娘で、スコットランドヤードの刑事であるケイト・リンヴィルは、休暇を取って故郷のヨークシャーに戻り、自ら事件を解明しようとする。しかしそれは、リチャードの後輩で、ケイトの世話係を買って出たケイレブ・ヘイルの神経を逆なですることになる。リチャード殺害事件の指揮は彼が執っており、ケイトにつねに先を越されてしまうからである。しかも彼はアルコール依存症の治療をしているところで、精神的に大きな問題を抱えている。

脚本家ジョナス・クレインは、妻ステラと長年不妊治療を試みたがうまくいかず、養子ももらい受けた。そのサミーの5歳の誕生日、彼の生みの母であるテリー・マライアンが恋人ニール・コートニーとともに突然訪ねてくる。クレイン家は、過労で休養が必要なジョナスのために、ノースヨークムーアズへの休暇旅行を計画していた。ステラの嫌な予感的中し、テリーたちはそこにもやってきて、ニールは家族を監禁し、テリーとともにアイルランドを目指して逃亡する。

リチャード殺しの捜査とクレイン家監禁事件はニールで交差するが、ケイトは別の方向、すなわち父親の過去をたどろうとする。しかし彼女がそこで知ることになったのは、母親の死後、彼女にとってたったひとりの頼れる人物であった父親の裏切り行為であった。

本作は、ドイツ本国で160万部超えのベストセラー¹⁶⁾となったミステリー小説であり、リンクにとって初のシリーズものとなる(2022年9月にシリーズ4作目 *Einsame Nacht* が発売になった)。本書には、『姉妹の家』や『もうひとりの子』にみられるような歴史的なテーマは存在しない。そういったいわば「大きな社会問題」ではなく、本書全体を通して、あるいは部分的に、「理想の家族」のなかにある裏切りや欺瞞、アルコール依存、過労、暴力による支配と服従、同性愛者や移民への差別、児童虐待など、現代社会におけるさまざまな日常的な社会問題が描かれている。なかでも「孤独」は本書を通底する問題のように思われる。これについては、次章で考察する。

III リンク作品の登場人物

前章ですでに示したように、リンク作品の特徴のひとつは、登場人物たちの心理や感情が細かく描写される点にある。本章では、登場人物の心理や感情の具体的な描写について考察する。

1. 主人公—自立した強い女？

リンク作品の主人公は、自立していて強い印象を与える。『姉妹の家』のバルバラ、『崇拜者』のレオナ、『沈黙の果て』のイエシカ、『もうひとりの子』のレスリーらは、弁護士や医師、編集者などの職業に就き、経済的にも精神的にも自立した女性たちである。一見何不自由なく見える

彼女たちであるが、実は内面に傷を抱え、孤独に悩んでいる。

『姉妹の家』のバルバラは有名な弁護士で、外見も完璧で、非の打ち所がない成功した女性である。夫も弁護士で、一見理想の夫婦である。しかし実際は、同業者の夫は彼女の成功に嫉妬して（一方ではバルバラが刑事事件の弁護士ということで見下している部分もある）、夫婦関係は破綻しかかっている。彼女にはまた、過食で太っていて冴えないティーンエイジャーだったという封印したい過去がある。『崇拜者』のレオナは、ベアのネーム入りペンダントやマグカップが当たり前の、周囲からもっとも羨まれるカップルだったのだが、夫に突然離婚を宣言され、これまでの生活のすべてが崩れ落ちてしまう。新しい恋人ができて精神的な安寧が訪れるかと思っただのも束の間、その男は嘘にまみれた人生を送ってきていた。『沈黙の果て』のイエシカは、アレクサンダーと静かで安定した幸福を求めたが、義娘は反抗期で、夫は殺されてしまう。しかも彼の卑怯な面を死後に知ってしまう。『もうひとりの子』のレスリーもまた、一夜の浮気をした夫を許せないでいる。壊れかけの夫婦関係だけではなく、育ててくれた唯一の親族である祖母の死と、祖母が犯した罪にも悩む。

上記の主人公は、たいていの場合、モノログや会話のなかで心情が読み取れるのだが、『姉妹の家』のフランシスは、自分を三人称で書いた「手記」によって、心情がもっとも読みやすくなっている。因習に縛られず、自由で、プライドが高い。男勝りで、馬や車を乗り回し、煙突のようにたばこをふかし、飲酒ではどんな男にも負けない。確固とした政治的信念があるわけでもないのに、刑務所でのハンガーストライキと強制摂食を生き抜いた。野戦病院では兵士たちの傷を数知れないほど縫った。第一次世界大戦後には農園経営者として家長に代わって家を守った。だが、彼女自身は、自らを「涙もろく、やさしくて、繊細で、感じやすい」人間だったと書き記している [HS, 346]。しかしむしろ彼女の半生においては、怒りや憎しみといった負の感情に支配されていたことを読者は知っている。

リンクはインタビューで、「フランシス、バルバラら女性の登場人物は、自分をしっかり持っている自立した人物が多いですね」というインタビュアーの感想に対し、次のように答えている。

「強い女性」というステレオタイプな捉え方は、あまり好きではありません。[...] バルバラの人生にもたくさんの破綻があります。非常にしっかりして見えますが、実は自信のなさや不安、疑いと闘っている人物です。内面にたくさんの矛盾をかかえている女性として、性格づけにも配慮したつもりです。¹⁷⁾

物語の終わり、主人公たちは、彼女らに降りかかる困難を乗り越えて生き残る。もちろんこれは物語としては「ハッピーエンド」であるが、しかし読者は、その先に待つ世界は、彼女たちにとってきっと平穏で幸福なものになるだろうと予見することはできない。リンク作品の結末は、むしろ、さまざまな問題を抱えながら、それでも彼女たちは何とか生きていこうとするのだろうと思わせるものである。その意味で、リンク作品の主人公が「強い」という感想は正しい。

もっとも、彼女たちの強さは、ときに傲慢さやわがままにもつながるものであり、弱い者、虐げられている人の気持ちを察することを難しくする。この両面性がもっとも表れているのが、『もうひとりの子』のフィオナである。彼女の手記はフランシスのそれに類似しており、物語におい

ては準主役のようなポジションになっている。だがむしろ、フィオナが強く生きてきたことの負の側面が、この物語の肝となっている。したがって、フィオナはヒール（悪役）として捉えることもできるのである。

2. ヒール（悪役）

娯楽文学の特徴として、善悪に二分化された登場人物というものがある。リンク作品にも意地悪で感じの悪い登場人物は出てくる。

『沈黙の果て』のパトリツィアは、小柄で華奢で、金髪の美人である。部屋には幸せそうな家族写真が数多く飾られている（「見て！ 私たちはどんなに幸せか！」[ES, 23]）。彼女は目覚まし時計が鳴ると同時に起き、血行を促進し肌の張りを保つために、冷水シャワーを浴びながら、硬いブラシで体を擦る。31歳でふたりの子持ちとは思えない、完璧な体 [ES, 99-100]。彼女の身体的な美しさは、努力の賜物なのである。自分が描く理想の人生のためには何でもやる。レオンとの結婚は妊娠したからであったが（エレナによれば、「パトリツィアのような人が、そのへんの男の子どもを偶然妊娠するはずなどない」[ES, 538]）、弁護士の妻となり、結婚4年目にはミュンヘンにマイホームを建てる。

多額のローンを組まないといけなかったが、当時レオンは超一流の法律事務所で働いていて、給料もとてもよかった。[...] 石、床板、屋根瓦、ドア、彼女はあらゆるものを建築士と入念に打ち合わせして選んだ。建築中の数ヶ月間はつねに現場にいて、自分のイメージ通りにきちんと施工されているかどうかを観察した。彼女がつねに変更を要求するために、建築士や現場監督は徐々に正気を失っていった。[ES, 122]

パトリツィアの厳しさは、自分だけではなく他人にも向かう。彼女が決めたルールを守らないリカルダを攻撃的にし、リカルダの日記を勝手に読んで、自分の悪口が書かれた部分を皆の前で読み上げる。あるいはフィリップを勝手に家にあげていたエヴェリンに、「バカじゃないの！」[ES, 163] と罵倒する。

パトリツィアとは逆の意味でのヒールは、『姉妹の家』のヴィクトリアであろう。髪も目もゴールドで、人形のようにかわいらしくてあどけなく、誰からもちやほやされる。絵のように美しく成長した彼女は、両親の期待を裏切ることなく名家に嫁ぎ、美しい衣装や宝石に囲まれた生活を送る。彼女はまさに人生の「勝者」であったし、とくに姉フランシスに対して勝ったことが、彼女のアイデンティティになっていた。

しかし、パトリツィアやヴィクトリアも、勝者のままでいられるわけではない。パトリツィアの夫レオンは破産寸前で、彼女がさんざんこけにしてきたエヴェリンの夫に金を借り、理想の家を手放さないといけなくなった。一方のヴィクトリアは不妊の末、離婚することになり、父親を怒らせ失望させた。前夫は未亡人と再婚し、子どももできた。年齢とともに美貌も衰え、誰もが彼女の誘いに乗るような時代は過ぎてしまった。

ここにあるのは、善悪の二分化というような単純な図式ではない。たしかに彼女たちの行動は恨みを買ってしまうことになり、その後の彼女らの運命を自業自得で「いい気味」(Schadenfreude)

と感じる読者もいるであろう。しかし彼女たちは、絶対的な悪ではない。パトリツィアは努力によって、ヴィクトリアは生まれつきという違いがあるものの、彼女たちのように「勝ち組」になりたいと思うことは、いまの社会においてけっして否定されることではない。それゆえ、主人公と同じく、ヒールもまた、アンビヴァレントで人間味溢れる造形になっていると言えるのである。

3. 孤独な女たち

孤独はリンク作品に通底するテーマである。登場人物たちは主役であれ、脇役であれ、孤独を嘆く。

『崇拜者』のリュウディアは、レオナにローベルトを引き合わせ、また姉の殺人事件の真相を探ろうとするリーザとも関わってくるが、話の本筋とはそれほど関連しない人物である。にもかかわらず、彼女の心理描写には相当のページ数が割かれている。

リュウディアは53歳で、早期退職し、いつも家にいる。未婚で家族はいない。彼女は、小太りで、髪は黄色く巻いていて、青白い顔をしている [DV, 116]。料理は得意だが、食べてくれる人もいないため、食欲がわからない。チューリップの花束でかわいらしく飾ったテーブルを喜んでくれる人もいない。もちろん結婚もしたかったし、子どももほしかった。求婚広告には目を通していたし、一度はエーファに後押しされて、勇気を出して実際に会ったこともある。だがそれも失敗に終わった。自殺したエーファは、彼女よりずいぶん年下だったが、リュウディアが聞き役に徹していなければ彼女との友情が成立しないことも知っていたし、「孤独に対する最後の砦」を自分から崩すつもりもなかった [DV, 180-181]。彼女にとって、日曜日は地獄である¹⁸⁾。

また日曜日が来た。リュウディアが一週間のなかでもっとも恐れる日だ。ひとりであることは、水曜日でも金曜日でも、火曜日でも木曜日でも、いつだって辛い。彼女にとって、週末だから何かが違うということはそもそもなかった。しかし日曜日独特のこの静けさは、いつもすさまじい力で彼女をおそってきて、息もできないほどになる。日曜日にはあらゆる考えが浮かんでくるのだ。先週はどうだった、とおしゃべりしたり、今週はどうする、と計画したりするパートナーへの憧れ。[…]

彼女はこぶしで両耳をふさぎ、目の前にぼっかりと広がる、真っ黒で冷たい、彼女の人生そのもののような絶望の淵にパニックになって、キッチンテーブルの上に泣き崩れるのだった。[DV, 374-375]

一方、物語のキーパーソンとなる孤独な女性たちに、『もうひとりの子』のグウェンと、『沈黙の果て』のエヴェリンがいる。

『もうひとりの子』のグウェンは、レスリーによれば、白馬の王子様を待ち続ける「前世紀の遺物」のようである [AK, 46]。物語の最後で、誰かに手を差し伸べてほしかったと、本当の気持ちを言えばよかったのに、とレスリーに言われたグウェンは、次のようにレスリーに問う。

「あなた自身がそれに気づかなかったの？ こんな生活をしている私が幸せだなんて、あなたは思っていたの？ […] 友だちもいない、人づきあいもない。自分に興味を示してくれる男もいない。普通の暮らしもかなわない。結婚、子ども、マイホーム。こういうこと全部、私が憧れていないなんて思ってたの？ 私に夢なんかないって？ そんなこと、本気で思ってたの、レスリー？」 [AK, 615]

夫とはうまくいかず、唯一の係累であるフィオナを失ったレスリーは、デイヴに対し、自分はグウェンと同じぐらい、ひとりぼっちで絶望的だと話している [AK, 463]。もちろんこれはグウェンの気持ちを聞いたうえで発言ではない。レスリーからすれば、グウェンは幸せであるはずはなかったし、彼女をどこか見下してもいた。それにグウェンがいつもほほ笑んで、辛く苦しいという本音を言わないから彼女を理解できなかった、という気持ちもあった。それゆえグウェンにこう問い正されたときに、彼女には「気の毒に思う」(Es tut mir leid.) としか言えなかったのである [AK, 616]。

『沈黙の果て』のエヴェリンもグウェンと同じような人物である。孤独で陰鬱で、自己肯定感が低く、過食症で太っている。唯一の希望であった子どもも流産してしまう。アルコール依存症の父親は母親に激烈な暴力を加え、そして自分もまた、異常性癖をもった暴力夫の犠牲になってしまう。物語の最後で、イエシカがエヴェリンと対峙する場面がある。

「エヴェリン、何もかも、ほんとにとても気の毒だと思う。」とイエシカは言った。「でも誓って言うけど、私、何も知らなかったの。あなたが隠していたことについて、何も知らなかった。」

エヴェリンは彼女を嘲るように見つめた。[…]

「あなたも一役買ったことになるのよ、エヴェリン。ティムはあなたが自分にとって最高の同志だと思ったから、あんなこと全部できたのよ。彼があんなに簡単にできたのは、あなたのせいでもあるのよ。でも、友だちたちには難しかった。だって、あなたは声をあげなかった。あなたは抵抗しなかった！」 [ES, 628-629]

イエシカは（そしてレスリーも）、自分の感情や考えはことばにできるはずであるし、ことばにしなないと伝わらないと考えているようである。しかしエヴェリンは（そしてグウェンも）、自分を語るためのことばを持ち合わせていない。そのこと自体を理解できないイエシカもレスリーも、彼女たちが正しいとしても、エヴェリンやグウェンのような人間を救済することはできない。結局、エヴェリンもグウェンも、ことば以外の絶望的な方法でしか自己を表現するしかできなかった。

だが、エヴェリンやグウェンのような人間には、絶望しかないのであろうか。『裏切り』以降4作品に登場するケイトは、この問いに対するヒントのように思われる。ケイトはスコットランドヤードの警部だが、典型的な地味な女性（「灰色のネズミ」）で、小柄で痩せていて、つねに自信なさげである [DB, 47]。彼女自身は自分をこう描写する。

39歳。いまだ独身。夫も、子どもも、パートナーも、友人もない。[…] 同僚たちは彼女と距離を置き、どうしても必要がない限り、彼女に近寄ってくることもない。自分についてひそひそと噂されていることも、彼女が会議で何か話そうとすると、冷たい視線が返ってくることも分かっていた。彼女が言うことは、いつもどこか間違っているようなのだ。あるいは、他の人にとっては間違っているような言い方をしてしまうのだ。そうこうするうちに、彼女はあまりにも自信を失ってしまっていて、もうほとんど何かを言おうとしなくなっただけで、できる限り決断を避けるようにもしていた。 [DB, 75]

さらに、ケイレブに酔って絡んだり、彼にただ食事に誘われるだけでもあれこれ思い悩んで断ってしまったりと、痛々しく気まずい描写が続く。ケイトは本作の主人公ではあるが、内向的で内省的であり、どちらかといえばエヴェリンやグウェンに近い人物になっている¹⁹⁾。しかし彼女のこういう性格こそが、本作のヒットにつながったと、訳者の浅井晶子は分析する。

読者の心をつかみ、本書を空前の人気作品に押し上げたのは、まさにそんなケイトだった。これは、大きな声こそ上げないものの、彼女と同じように社会において「こうあるべき」とされる生き方ができずに、生きづらさを抱えて悩む人たちが数多くいることの証左ではなからうか。²⁰⁾

エヴェリンやグウェンは救われることはなかったが、今後、孤独に悩み、人間関係がうまく構築できないケイトがどう変化していくかが、ことばを持たない、あるいは声をあげられない人をいかに救えるかに対する作家の答えになるのではないだろうか。

4. 男たち

さて、リンク作品においては、いわゆる完全無欠のヒーローのような男性は出てこない。不倫やモラルハラスメントをする夫、外見は完璧だがサイコパス。女性や子どもに暴力をふるい、虐待をする。『裏切り』のケイレブは、仕事や生活の行き詰まりをアルコールで解消しようとする。恋愛小説や少女漫画に登場するような、ヒロインを全面的に理解し包容してくれる理想的な男性たちは登場しない。そのような男性は空想の産物ということなのであろう。この意味ではリンクは徹底したリアリストである。リンク作品が、現実の日常生活における問題をテーマとするかぎり、そういった問題の多くは親密な人間関係、とりわけ家族やパートナーや友人から生じていることを考えれば、男たちをリアルに描写することは当然のことなのであろう。

IV リンク作品と「感情のリアリズム」

以上に示したように、リンクの作品においては、主役であれ脇役であれ、女性の登場人物たちの心理や感情、とりわけ怒り、腹立ち、ショック、不安、孤独、痛々しさ、辛さ、絶望といった、負の感情が細かく描写されていることが特徴である。この部分は、すでに述べたように、とくにミステリー小説にとっては「余分」であり、実際読者レビューでもそういう不満はよく見られる。

それゆえテレビドラマ化される際には、この「余分」が問題となる。およそ 600 ページの長編小説を、1 話完結であれば約 90 分、前後編であれば約 180 分にまとめなければならず、必然的に話の筋には直接関係のない登場人物やその心理描写などの「余分」はそぎ落とされ、ストーリーだけが取り出されることになる。テレビドラマ『裏切り』（2018 年 1 月 4 日、ARD にて放映）について、「テレビドラマの方が原作より優れている」と題した番組評が掲載された。

物語中しばしば余分に感じられるもの—不必要なエピソード、繰り返し、登場人物の紋切り型でくどい描写—をそぎ落としたことが大きな成功になっている。この巧みな短縮と圧縮によって、心理的な緊張感が非常に高まることになる。[…]²¹⁾

その一方で、このテレビドラマの「余分」のそぎ落としに対する視聴者の落胆の声も見られる²²⁾。もちろん、そもそも小説（とくにいわゆる「ネタバレ」を含む推理小説の場合）、アダプテーション自体にさまざまな難しい課題があり²³⁾、映像化に対する原作ファンからの批判はよくあることである。しかし「余分」をそぎ落としてしまったアダプテーション作品は、読者にとっては、もはや別ものになってしまう。こういった読者にとって、ストーリー展開もさることながら、登場人物の心理や感情の描写がやはり重要なのである。

上述したように、この「余分」には、登場人物たちの、とくに負の感情が書き込まれている。負の感情というのは、社会のなかでは押し込めるべきとされるものである。人間関係を円滑にするためには、とりわけ女性の妻や母という役割においては、怒りや腹立たしさを抑え、優しく寛大であるべきである。社会でうまく生きるには、コミュニケーション能力を高め、ことばを通じて自己表現すべきである。異性からの愛を得るには、女らしさだけではなく、外面の美しさも必要である。「孤独を感じることは究極の恥」²⁴⁾であり、家族や友人に囲まれてこそ人は幸福になれる、等々。リンク作品の登場人物たちは、例外なくこのような「愛されるため」「幸福になるため」の社会規範を強固に内在化し、それにがんじがらめになっている。それは何もエヴェリンやグウェンのように、自らを「規格外」とみなさなければならない人においてだけでなく、パトリツィアやヴィクトリアといった「勝者」においても、そこから外れることへの恐怖や不安を読み取ることができる。

殺人や監禁など、リンクの作品で生じる出来事は、多くの人にとっては非現実的ではあるが、登場人物たちが生きる世界はリアルであり、そこで生起する感情もまたリアルである。読者は登場人物に同一化して腹を立てたり、辛さを感じたり、ときには泣いたりすることもあるだろう。あるいは傍観者として、彼女たちの不可解な行動や意気地のなさを苦々しく感じ、皮肉を言ったりするかもしれない。リンク作品の心理や感情の描写は、読者が登場人物たちの世界のなかであたかも「体験」しているような気持ちにさせる。このような読者のテキストへの関わり方を、文化研究者のイエン・アングは、「共示的なレベル」(connotative level)での関わりとし、このような体験を「感情のリアリズム」(emotional realism)と呼んだ。ただし、こういった読み方をすべての読者がするわけではなく、テキストにどのように関わるかは、さまざまな文化的アイデンティティからなる主体として読者が持つ文化的能力や文化資本に関連するとしている²⁵⁾。

しかしながらリンクは、こういった心理や感情描写だけではなく、こうした束縛から、自らを何とか解放しようとする登場人物たちの姿も同時に描いている。フランスからの支配もしくは彼女への依存から、自らを解放したローラ（『姉妹の家』）、フィリップの愛情を得るための無駄な努力を放棄したジェラルディン（『沈黙の果て』）²⁶⁾、ニールの暴力を愛情と思い込もうとしていたが、最後には意を決して逃げ出したテリー（『裏切り』）などがそうである。記者の浅井は、リンクの作品が「登場人物たちの一種の成長物語にもなっている」とする²⁷⁾。この成長物語の部分は、心情描写のリアリズムとはまた別種の、いわば「ファンタジー」であり、読者に力や勇気を与え得るものである。

V おわりに：文化的テキストとしての娯楽文学

以上、リンク作品が、現代社会に普通に暮らす人々、とりわけ女性が直面するさまざまな問題をテーマとし、現代社会の価値規範にしばられることによって生じる負の感情をリアルに描写すると同時に、「成長物語」のファンタジーが読者にとって力になり得ることを示した。

本稿では女性というジェンダーを軸に、リンク作品を現代社会の問題性を表象する文化的なテキストとして理解しようとした。一方、日本で活躍するドイツ人の翻訳家でミステリーにも造詣が深いマライ・メントラインは『沈黙の果て』を評して、「現代ドイツ人が溜め込んでいる各種欲求とストレス…支配欲、権威欲、完璧主義、そしてそれらと表裏一体な卑屈さ、『満ち足りた日常』をアピールするための精神生活の歪み…といったドロドロしたものどもが、実に赤裸々に」噴き出しているとする。そして、この作品が「ドイツのアップーミドル社会の精神的暗部を的確に突いて」おり、「これらの特質は、まさにドイツ教養層がナチス勃興やユダヤ人迫害を傍観するだけに終わったことのひそかな要因であり、それは戦前も、戦中も、そして戦後もあまり変わっていない」と続ける²⁸⁾。これは「ドイツ性」というナショナルな概念を軸にした、ドイツ文化内部からの読解の一例として見ることができるだろう。

メディア研究者のヴェルナー・ファウルシュティヒは、シャルロッテ・リンクについての研究書のなかで、「彼女の小説は、どのような潜在的意味を持つのか？ なぜ私たちは彼女の小説を買って読むのか？ 彼女の小説を読むとき、どういった欲望、不安、憧憬、恐怖、希望、夢が心を打つのか？ 読者は彼女の小説をどのように用いているのか？ そして彼女の小説は、今日の社会とどのように関連しているのか？」といった問いを立てるべきだとした。しかし同時に、このような問いを立てる研究はまだほとんど存在しないと述べている²⁹⁾。たしかにドイツの有名新聞や雑誌の文芸欄では、リンクのみならず娯楽文学全般に対し、本当に読んだかどうかも疑わしい、的外れで悪意のある書評が相変わらず書かれている。また、他の欧米諸国に比べ、娯楽文学研究も全体的に立ち遅れている。このような状況に対し、本論考のように娯楽文学作品を文化的テキストとして理解することは、娯楽文学研究における新たな視座を提供し得ると考える。

注

- 1) Penguin Random House "Charlotte Link". <https://www.penguinrandomhouse.de/Autor/Charlotte-Link/p1183.rhd> (最終閲覧日 2022 年 9 月 11 日)
- 2) 実際の歴史的な出来事を背景に、実在の人物をモデル、あるいは架空の人物を主人公にした小説は Historischer Roman (歴史小説) と呼ばれるが、これは文学理論上の厳密な意味での専門用語ではなく、娯楽文学小説のジャンルや傾向を示すために用いられている。ある出版社の「歴史小説執筆指南」では、テーマとして「悲劇的な恋愛物語、商人の冒険譚、貴族一家の興隆と没落、歴史推理小説」が挙げられている。(Frieling-Verlag: Historische Romane schreiben. <https://frieling.de/Schreibtipps/Historische-Romane> (最終閲覧日:2022 年 9 月 11 日))。ただし、リンクの初期の小説を歴史小説と呼ばず、Gesellschaftsroman (社会小説) と呼んでいる書評もある。この「社会小説」も文学理論上の専門用語ではなく、日本語では「社

- 会（派）小説」のような意味合いで、書店でのジャンル分けなどに用いられている。
- 3) Kriminalroman とは犯罪とその解明を扱う小説のジャンルと定義できる。英語では crime fiction、日本語では「推理小説」となるが、近年日本ではより幅広く「ミステリー」と呼ばれることが多い。したがって本稿では、Kriminalroman, Krimis に「ミステリー」という用語をおもに当てるが、謎を解くことがメインの探偵小説や警察小説には「推理小説」という語を用いることがある。ドイツの大手出版社 (Amazon.de, Thalia など) ではミステリーはスリラーと一緒にされ、Krimis & Thriller というジャンル設定になっている。
 - 4) 本稿では 1999 年に発刊された Goldmann 版を用いる。なお本稿の日本語訳はすべて私訳である。
 - 5) リンクは好んでイギリスを小説の舞台としている。ドイツ人作家がイギリスを舞台にすることについてはさまざまな意見があるが、作家の国籍と異なる舞台設定はあり得ないことではない。詳細は拙稿「ドイツにおける推理小説のテレビドラマ化—最近の作品を中心としたアダプテーションの事例研究—」(オリバー・マイヤー編『ドイツ・ミステリーを読む・観る—インターカルチュラルリティとインターメディアリティの観点から』日本独文学会叢書 137、2019 年、55～77 ページ) のシャルロット・リンク『もうひとりの子』のアダプテーションの考察を参照。
 - 6) 強制摂食とは、胃に管を直接入れて栄養を補給する強制的な食餌方法である。ハンガーストライキをする受刑者などに対して実施された。
 - 7) 赤坂桃子 (構成) 「著者に訊く：シャルロット・リンク『姉妹の家』—時を超えて始まる女性たちの物語』『青春と読書』45 (4)、集英社、2010 年、64～66 ページ。
 - 8) 同上。
 - 9) Werner Faulstich: Was macht ein Buch zum Bestseller? In: Kutzmutz, Olaf (Hrsg.) : *Bestseller. Das Beispiel Charlotte Link*. Die Bundesakademie für kulturelle Bildung Wolfenbüttel, 2010, S. 9-26, hier Seite 15.
 - 10) Verehrer ということば、「崇拜する人」「求愛する人」「熱烈なファン」という意味の男性名詞だが、本文中では主人公の夫や母、あるいは担当の刑事が彼女の恋人を指して、「(彼女をとっても好んでいる) 彼・恋人」といった意味で Verehrer を使っている。しかし彼女は Verehrer を「花束、ブラリネのプレゼント、熱烈なラブレターを連想させる、時代遅れのことは」[DV, 274] と感じている。
 - 11) 本稿では 2022 年発行の電子版 (Kindle for iOS) を用いた。
 - 12) ドイツ書籍出版販売取引所組合によって設立されたドイツの文学賞。2002 年から 2004 年まで存在した。2005 年以降は Deutscher Buchpreis (日本語にすると同じく「ドイツ書籍賞」となる) へと引き継がれた。
 - 13) Stefan Locke: Die Frau mit der Formel. In: *FAZ (Frankfurter Allgemeine Zeitung) Net*. 2012. 12. 29. <http://www.faz.net/aktuell/gesellschaft/menschen/charlotte-link-die-frau-mit-der-formel-12009250.html> (最終閲覧日: 2022 年 9 月 11 日。現在は有料で閲覧可能。)
 - 14) それゆえ第二次世界大戦の部分では、ドイツは「敵」として描かれている。これは『姉妹の家』でも同じである。
 - 15) タイトルを直訳すれば『裏切られた女』となるが、本稿では浅井訳のタイトルを用いる。
 - 16) 邦訳『裏切り』単行本の帯のキャッチコピーより。
 - 17) 赤坂、前掲記事、65 ページ。
 - 18) ドイツでは日曜日・祝日の店舗の休業を法律で定めている。また「休息时间」といって、騒音を立てることができない時間も法律や条例等で定められている。したがって日曜日 (とくに朝) は、一週間のなかでもっとも静かな時間になる。
 - 19) リンクは、ケイトは若い頃のリンク自身に似たところがあるという。ケイトが今後どうなっていくのかをもっと知りたかったというのが、シリーズになった動機であると述べている。Giuseppe Di Grazia: „Und dann dachte ich: Das war’s.“ Ein Treffen mit Charlotte Link, deren Selbstzweifel so groß sind wie ihr Erfolg. In: *Stern Crime*. Heft 33, 2020, S. 110-116, hier S. 116.
 - 20) 浅井晶子「訳者あとがき」シャルロット・リンク『裏切り』(下)、創元推理文庫、2022 年、380～381 ページ。

- 21) Wolfgang Platzeck: Der ARD-Krimi „Die Betrogene“ ist besser als seine Vorlage. In: Berliner Morgenpost Online, 2018. 4. 1. <https://www.morgenpost.de/kultur/tv/article213016331/Der-ARD-Krimi-Die-Betrogene-ist-besser-als-seine-Vorlage.html> (最終閲覧日: 2022年9月11日)
- 22) たとえば Amazon.de の Charlotte Link: *Die Betrogene/Im Tal des Fuchses* (DVD) のページでは、原作と異なることに「がっかりした」というレビューが散見される。
- 23) 前掲の筆者拙稿(注5)では、推理小説のアダプテーションの問題点も論じている。
- 24) Di Grazia、前掲記事におけるリンク自身の発言。とくに女性は、「友だちいないの?」「パートナーを望んでいないの?」と問われ、まず自分自身を知るように言われる。しかし自分を知ったところで幸福になるわけではなく、幸福でないことを周囲に隠すために膨大なエネルギーがいる、とリンクは説明している。この点では、「おひとりさま」文化が定着しつつある日本とは、文化的背景が異なっているように感じる。
- 25) Ien Ang: *Watching Dallas. Soap Opera and the Melodramatic Imagination*. Methuen, 1985, p. 79. 「感情のリアリズム」については、Ien Ang: *Television Fictions around the World: Melodrama and Irony in Global Perspective*. In: *Critical Studies in Television: The International Journal of Television Studies*. 2 (2), Sage, 2007, pp. 18-30 も参照。
- 26) ただし、フィリップが釈放された後、ジェラルディンがまた元の状態になりそうなのが示唆されている [ES, 658-659]。
- 27) さらに、「著者シャルロット・リンクの小説が多くの読者の、特に女性読者の絶大な支持を集める理由のひとつは、こういったタイプの人間に注がれる、決して哀れみや同情や侮蔑ではない、厳しく容赦ないながらも温かな理解と励ましの視線にあるのではないか」と続けている。浅井晶子「訳者あとがき」シャルロット・リンク『失踪者』(下)、創元推理文庫、2017年、373ページ。
- 28) マライ・メントライン「旧世代ドイツミステリの逆襲! 【沈黙の果て】 By シャルロット・リンク」<https://young-germany.jp/2014/11/シャルロット・リンク-沈黙の果て/> (最終閲覧日: 2022年9月11日)
- 29) Faulstich, a.a.O., S. 11-12.

Summary

Charlotte Link's Mystery Novels: Reading Popular Fiction as a Cultural Text

Charlotte Link (1963-) is one of the most successful and best-selling authors in Germany. This article discusses her five mystery novels, focusing on the female characters. Link realistically portrays the women's negative emotions such as anger, hatred, loneliness, and despair as they face problems in their relationships, feel lonely, and live with internal scars. These negative feelings arise, however, because they, as women, are bound by the social norms of modern society. This includes such things as the idea that loneliness is shameful, or that happiness can be attained through being loved by someone.

At the same time, however, their attempts to free themselves from these shackles are also described in Link's novels. These descriptions of the psychology and emotions of the characters are "superfluous" to the main plot, but they are so realistic that they trigger the reader's emotional involvement in the text. In this paper, I read Link's works as a cultural text from a gender perspective and demonstrate one possible method for popular fiction studies.

Keywords: Charlotte Link, best-selling novels in Germany, female characters, emotional realism, cultural text